

+

2022年

1月第1・2週の主日礼拝説教要約

・ 1月 2日：ルカ福音書 2：41-52.

「少年イエス」

・ 1月 9日：マタイ福音書 3：13-17.

「川に浸かる神」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

キリストが去った後、使徒たちの中に存命者がまだいた頃に、「イエスは受難したように見えただけだ」とする説をとる者が現われました。この説に従うと、神の子の肉体が十字架上で血を流し、痛みを覚えていたその時にはイエスの霊は傷ついた肉体ではなく、ご自身はその光景を外から眺めていたことになります。

すると、「全き神であり全き人である」といわれるイエスの存在は仮にそう見えただけの「仮現」であったとする説(仮現論)が、成立してしまふのです。

地上で生まれ、そこを歩いて移動し人々と語り合ったナザレのイエスの生涯を、殆ど知らない使徒パウロの宣教がイエスの愛弟子たちに先んじて世界に広まった時、彼の力だけではこうした「仮現論者」を説得するのは困難かと想われました。

ローマにおけるパウロの殉教(AD60年)と前後して、世に出始めた数種類のいわゆる福音書は、この仮現論の否定のためには大いに役にたつことになります。

中でもルカによる福音書は、イエスの誕生(予告)から受難と復活、昇天、さらには地上にのこされた弟子たちや、パウロのように後から加わった者の宣教活動まで、全てが生身の人間の手でなされたことを克明に記しているのです。

乙女マリアからイエスが生まれ、その少年時代が印象的な形で送られたことまで、時系列に従ってルカは記しています。

イエスが12歳の時とは西暦7年前後の頃でしょうか、ユダヤ人たちは可能なかぎり、民族最大の祭りである春の過越しの祭りを祝うためにエルサレムに集います。イエスもナザレの両親に連れられて、現地に赴きました。さて、現地での祭事の記述はないものの、祭りの後の出来事がおそらくは母マリアの記憶の中から掘り起こされます。エルサレムから下る帰り道、宿場の前に集合したイエスの家族と一族郎党は点呼をとるまでもなく、その場にいるべき少年イエスがまだ到着していないことに気が付きます。どこではぐれてしまったのやら、誰にもわかりません。

しかたなくイエスの両親は、今来た道をそのまま引き返すことになりました。道々わが子の名を叫びつつ、とうとう目的地だったエルサレムに舞い戻り、幸い、祭りの後の客の減った宿屋に寝泊りしつつ、広大なエ

ルサレムの街を隈無く捜し回りました。

三日目のこと、イエスは何と神殿の境内に陣取り現地の学者たちと何やら語り合っています。良くも悪く(?)も、変り者のわが子イエスを見つけた両親は、親に心配をかけた息子を叱り付けます、「どうしてこんなことをしてくれたの!」。学者たちも、さぞかし母親の剣幕には驚いたことでしょう。けれども、イエスの返答に、今度はその場にいた人々はさらに驚かされます。「どうして僕を捜しにここまで来たの?僕が自分のお父さんの家について当然だ、ということを知らなかったの?」

そうです、イエスは神の独り子であり、ナザレの両親の子供でもありました。イエスの親は三人いたのです。少なくともこの三日間イエスの世話をしていたのは、間違いなく彼の天の父なる神だったのでした。

説教《川に浸る神》

大洪水をノアの方舟の船内で生き延びた絶滅危惧種の人類は、新たに出現した陸地に立ち、再び子孫を増やすことに専念します。神は彼らの中からアブラハムとその子孫(＝イスラエル民族)に目をかけますが、この民族、なかなか神の意に導くことなく充てがわれた居住地を度々失い流浪の民と化するのです。

荒れ野で食い繋ぐことに疲れたこの民は、やがて文明の地エジプトに寄留し、神からも見離されて、その地で400年以上もの間、奴隷の民族として生活し、再び絶滅の危惧を味わうことになるのです。

曾てこの民に目をかけた神は、見るに見兼ねて再び彼らに手を差し伸べます。彼らを逆境の地エジプトから救出するための策を講ずることになります。その大脱走劇こそ、神の人モーセに率いられたイスラエルの出エジプトでした。ただし、その後40年間、彼らは再び流浪の民の生活を強いられます。この不幸の根底にあるのが、イスラエル民族の不信仰であることを聖書は告発します。神の選びの実体は、この民族の歴史そのものに現われてきます。

これを新約聖書に当て嵌めると、イエスが選んだ12人の弟子の中にこれといった優等生が一人もないことをもって、神の選びの何たるかがわかります。優等生なら、神の助けがなくとも人の助けがあれば充分なのです。

むしろ造り主は、聖書を読むかぎり、神の助けがなければ自立することの苦手な者たちに対する大きな責任を負っておられることが、よくわかります。

剣を免れた民は荒れ野で恵みを受ける。イスラエルは安住の地に向かう、遠くから、主は私に現われた。(聖書協会共同訳エリヤ書 31:26)

剣を免れて生き残るイスラエルが、波瀾万丈のすえ、将来、再び荒れ野で、一から出なおす時の主なる神の導きがここに記されています。そこがなぜ、荒れ野なのでしょう？ そうです、全てを失ったうえでなおも生き残る者のスタートラインは、常に荒れ野なのです。さらに、これこそが神の存在証明そのものなのです。神がおられなかったら、とっくに滅亡していたはずのイスラエルが生き延びるのは、ひとえに神のお陰だからです。

さて、いつの世にあっても、荒れ野において起こることこそが、新しい時代の幕開けにふさわしいことを聖書は教えます。そこに置かれた人間は、全てを失った者、乃至は絶対的に無力の状態に置かれた者たちです。与える物など何もなく、ただ受け取る以外に何もできない難民と同じです。神の出る幕がそこにはあります。

神の独り子が、そこに出現するのは聖書においてはごく自然なことでした。ただ、すでにそこにいたのは駱駝の毛衣も着て腰には革の帯を締め、野蜜といなごを飲み食いしていた洗礼者ヨハネでした。当時、この評判の野人から、悔い改めの洗礼を授けたい者たちが大勢いたことが聖書には記されています。ユダヤの支配階級や上流社会に属したと思われるサドカイ人やパリサイ人、彼らは野人から罵られつつ洗礼を授かることで、人生の再出発をはかりました。さらに、そこに来ていた者の中に兵士や徴税人もいたという証言まで記されています(ルカ福音書3:12以下)。

この日、最後に現われたのが神の独り子ナザレのイエスです。いちばん驚いたのは洗礼者のヨハネです。二人は互いの存在を認知しておりました。ただ、ヨハネには人としての限界が、またイエスには神としての全能が備わっています。その歴然とした本質の差をヨハネがどの程度把握できていたかはわかりません。だからこそヨハネは、イエスに洗礼を授けるといふ恐れ多くも苦渋の選択ができたし、イエスも回避しませんでした。凡そ、神と人との出会いとは、そういうものだということです。